

会期：2021 年 10 月 19 日（火）－11 月 14 日（日）
平日：11：00－19：00　日・祝：11：00－18：00
毎週月曜休（月曜日が祝日にあたる場合も休廊）
主催：株式会社 資生堂
※新型コロナウイルスの感染状況により、スケジュールおよび
内容に一部変更が生じる場合があります

仮想の嘘か|かそうのうそか

菅 実花

Imaginary Lie　Mika Kan

「shiseido art egg」は、「新しい美の発見と創造」という考えのもと、オープン以来100年以上にわたり活動を継続してきた資生堂ギャラリーの門戸を新進アーティストに開く公募制のプログラムです。15回目となる今回は、全国各地より243件の応募をいただきました。今回も資生堂ギャラリーの空間を活かした独創的な展示プランが多く提案されましたが、選考の結果、独自の視点から今日の世界の新しい価値観や美意識を表現する、石原　海（いしはら　うみ）、菅　実花（かん　みか）、中島　伽耶子（なかしま　かやこ）が入選し、それぞれの個展を9月～12月にかけて開催します。

3名の応募プランには、不確実・不安定と言われるこの時代の危うさや希望の在処を問う意識が共通して秘められ、あらためて鑑賞や作品への参加を含む「アート体験」について考えさせられるものです。展覧会を通じて、アートだけが提供できる経験を共有しようとする姿勢には、先行きの見えない時代の中で新しい価値を生み出していく貴重なヒントが孕まれているのではないのでしょうか。

第2期は、菅実花による「仮想の嘘か|かそうのうそか」を開催します。

菅は、これまで生殖をテーマに、人形を写真に撮ることで「人間とは何か」を探索してきました。

本展では、2019年より取り組んでいる、作者自身の頭部を型取りして作った人形と一緒に撮影するセルフ・ポートレート「あなたを離さない／I Won't Let You Go」シリーズの最新作を展示します。すでに畜産業などで実用されている体細胞クローン技術を踏まえ、「人工的な双子」としてのクローンを描いています。ギャラリーの空間は、写真・映像・インスタレーションによって構成されており、展示された作品群は、19世紀から20世紀にかけてサイエンス・フィクションに登場する人造人間の系譜と、同時代に発明された光学機器にヒントを得て制作されています。万華鏡に見立てられた空間では、イメージがリフレクションします。視覚認識を揺さぶる展示は、近未来の価値観の変化を予感させ、鑑賞者に新たな世界を提示してくれるでしょう。

18世紀の終わり頃から、幻灯機（ランプとレンズを用いたスライドプロジェクター）によって幽霊のイメージを煙幕などに映す怪奇ショー「ファンタスマゴリア」の興業が、イギリスをはじめとする各地で行われた。やがて写真術が発明されると、手彩色だったスライドにも応用されるようになった。一方で、1862年に「ダークスのファンタスマゴリア」として評判になった演劇では、幻灯機とは別の「ベッパーズゴースト」という機構が使用された。この装置は、舞台上の実際のセットとガラスに映る虚像の幽霊役を重ねて見せるものだ。観客は、演出された人工の幽霊と知りつつ、本物の幽霊を想起し恐怖したという。

光学機器の発明が相次いだこの時代、文学ではそれらとともに双子や分身というモチーフが描かれ、自己の二重性や自我の葛藤といったテーマが探求された。E・T・A・ホフマンは日記に「私は私の自我を、万華鏡を通して覗いて見たー私の周囲を動ける総ての形姿は、私の自我である。」と記している。ホフマンの『砂男』（1816）では、主人公が望遠鏡を通して見えた自動人形を人間の女性だと思い込む。光学機器は光を反射し屈折させ、イメージを増殖させて視覚幻想を引き起こすのだ。

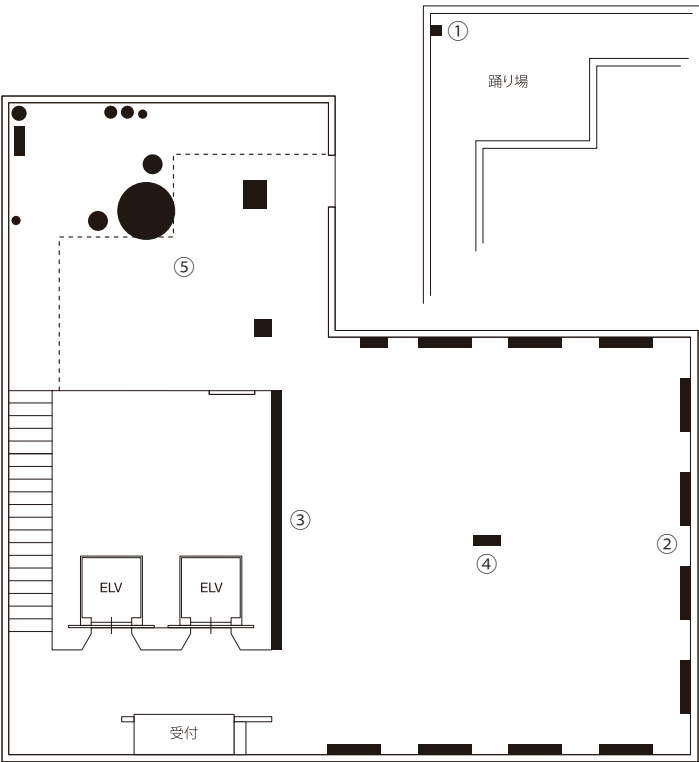
ところが20世紀初頭にかけて光の正体が解明されるにつれて、文学の中から超自然的なモチーフは徐々に姿を消した。かわりに人間そっくりな機械仕掛けのアンドロイドや細胞培養によって作られた人造人間が登場する。カメラのようなコピー装置で人間を複製したり、人工授精で怪物的な子供が生まれたり、といった発想もこの時代のものだ。

1920年代に登場した「人形写真」は、虚構の世界を一時的に信じさせるという点で、演劇に似ている。人工の幽霊が幽霊役を演じたように、「人形写真」では人工の人間である人形が人間を演じる。人形は明らかに生命のないモノなのに、どうしても人間的な何かを感じてしまう。「人形写真」は、写真が事実の痕跡を再現すると信じられたからこそ成立した表現だった。しかし、フィルターを通して歪められ、さらにデジタル加工を加えて画像を作ることができる現在、事実を確かめる術はない。偽物と本物の区別が限りなく曖昧になったとき、私たちは何を見ていることになるのだろうか。

菅 実花

展覧会タイトル「仮想の嘘か|かそうのうそか」について

前から読んでも後ろから読んでも同じ、回文になっています。「の」を中心に反射する鏡のようなイメージです。「仮想」には、「仮定としての想像」と「バーチャルの」という意味があります。作品は「もしそうだとしたら」と想定して表現する「嘘」なのでしょうか？あるいは写っているものはデジタルで改変された「嘘」の姿なのでしょうか？終助詞の「か」は疑問だけでなく反語も表します。疑問ならば「仮想の嘘か？」ですが、私はハテナを付けませんでした。願わくば「仮想の嘘か（いや、そうではない）」と読むことが可能であってほしいです。



- ①《眼の中の光》2021
ガラス、ハーフミラー、LEDライトユニット、グラスサンド
制作協力：大鎌章弘（ガラス作家）
- ②《ステイ パラダイス》2021
インクジェットプリント
制作協力：株式会社カシマ
- ③《分身万華鏡》2021
映像 1分47秒ループ
- ④《注意深く見るための機械 05》2021
フレネルレンズ、鉄
- ⑤《パラダイス シフト》2021
木材、アクリル板、モニター、映像 2分29秒ループ、プリズム、
遠華鏡、iphone、回転台、テーブル、椅子、スツール、フロアライト、
エアプランツ、フェイクグリーン、絵画、写真、鏡、額、イーゼル、
キャビネット、壁紙
制作協力：And Greenworks株式会社 PLANTS and LIVING

「パラダイス」について

私は現在、千葉県松戸市にあるアーティスト・イン・レジデンス（AIR）「パラダイスエア」の一室をスタジオとして借りて作品制作をしています。元々ホテルだったビルを活用しているため、部屋の内装がそのまま活かされています。そこに自分で家具や機材を追加して、作業しやすいスタジオに整えていきました。

ステイパラダイス

コロナ禍で出された「ステイホーム」の宣言は、私にとってはスタジオに一人で籠もって黙々と制作する「ステイパラダイス」を意味しました。人間と直接会うことを極力避け、代わりに人形とずっと一緒にいた結果、型取りから3年目にして、たまに話しかける間柄になりました。

パラダイス シフト

ビルの1Fはパチンコ「楽園」で、そこからレジデンスが「パラダイス」と名付けられました。「楽園」から追い出されれば生の苦しみを負うのでしょうか。だったら、私はここに居続けるために自分自身も変質させようと考えました。こだわっていた写真作品から飛び出し、インスタレーションやデジタル合成を駆使した映像に取り組んで、当たり前を更新していくことが必要でした。《パラダイス シフト》内の黒い箱は、19世紀の視覚トリック「ベッパーズゴースト」をモニターで再現したものです。「人間とは何か」を探究し、自分自身も変質させた結果、パラダイスの「ゴースト」は人間と人形のあいだにいる何かになりました。

菅 実花

1988年　神奈川県生まれ

2021年　東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻博士後期課程修了
千葉県在住

主な個展

2021「BankART U35 菅実花個展」BankART KAIKO（横浜）

2019「The Ghost in the Doll」原爆の図丸木美術館（埼玉）

主なグループ展

2020「彼女たちは歌うListen to her Song 」東京藝術大学大学美術館陳列館（東京）

2020「VOCA展2020 現代美術の展望－新しい平面の作家たち－」上野の森美術館（東京）



第15回shiseido art egg 菅実花展　特設サイト
菅 実花より、さらに詳細な情報をご案内します。